「息子は生きる：望み見る信仰」

ヨハネによる福音書 4 章 43〜54 節

同胞の皆さん。今日、私は皆さんに申し上げたい。このとき、どれほど困難にみまわれ、どれほど 心挫(こころくじ)ける思いにさせられようとも、私にはなお 夢があることを。私の夢、それは アメリカ建国の夢に深く根ざした夢なのです。・・・それは「・・・すべての人は等しく創造されてある」と語る、その信条です。

そうです。私には 夢があります。いつの日か、ジョージアの赤茶けた丘で、かつて奴隷だった者たちの息子が かつてその所有者だった者たちの息子と、兄弟のテーブルに共に着けるにちがいないという夢が。私には 夢があります。不正と抑圧に焼かれる砂漠のような州 ミシシッピでさえ、いつの日か、自由と正義の湧くオアシスに変えられるにちがいないという夢が。私には 夢があります。私の 4 人の小さな子どもたちがいつの日か、肌の色によってではなく、内なる品性によって評価される国に住めるにちがいないという夢が。・・・そうです。私には 夢があります。・・・アラバマでさえ、いつの日か変えられ、黒人の小さな男の子や女の子が白人の小さな男の子、女の子と手を繋(つな)いで、兄弟姉妹として歩けるにちがいないという夢が。私は今日(きょう)、夢を抱(いだ)いて ここにいます。・・・いつの日か、谷がすべて高くされ、山と丘が残らず低くされ、険しい所が平地にされ、曲がった所が真っすぐにされ、そのようにして 主の栄光が現わされ、肉なる者が共にこれを見るにちがいないという夢が。

私たちの希望は、ここにこそあります。これを信じる信仰を携え、私は南部に戻ります。この信仰によってこそ、私たちは絶望の山から 希望の石を切り出せる。この信仰によってこそ、私たちは 罵(ののし)り合(あ)いの不協和音に満ちるこの国を 兄弟愛の美しい交響曲を奏でる国に変えられる。この信仰によってこそ、私たちは共に働き、共に祈り、共に闘い、共に刑務所に入り、共に自由のために立ち上がることができるのです。いつの日か、自由にされることを知っているからです。

今は亡きキング牧師の有名な演説「私には 夢がある」からの抜粋です。キング牧師はアメリカで人種差別撤廃のために闘い、その途中、テネシー州のメンフィスで凶弾に倒れて 天に召されました。演説は 1963 年 8 月 28 日、デモに参加した 21 万に及ぶ聴衆を前にして、首都ワシントンのリンカーン記念館の壇上からなされたものです。20 世紀の記念碑的演説の一つに数えられるとともに、信仰の漲(みなぎ)る演説として 力に溢(あふ)れ、人々の心を深く動かしたと言われています。

御存じのとおり、キング牧師は黒人の牧師として、人種の平等を求めて闘いました。敵をも愛する、

すなわち白人をも愛する信仰に立ちつつ、が同時に、同じ信仰が要求することとして、社会正義の実現を求めて闘いました。そして、その働きを大きな契機として、公民権法をはじめ、人種差別を禁止する様々な措置が執られるようになります。ただし、初めにこうして キング牧師の演説を御紹介したのは、そうした人種差別の問題もさることながら、今回は、そこにとりわけ明確に「希望の信仰」が息づいているからにほかなりません。演説の背後には 疑いもなく、見えない事柄を望み見る信仰が横たわっていると感じられないでしょうか。「私には 夢がある」と語り、その夢の実現を信じて 生涯を献(ささ)げたキング牧師。そのキング牧師の取り組みを支えたもの。それは、神への深い信頼のもと、いまだ見えざる事柄を望み見て信じる信仰だったのではないでしょうか。自身の犠牲をも覚悟しつつ、そのなかでなお 事を望み見る信仰です。実際、その取り組みはすべて、まだ何一つ実現していない、そのところから始められました。逮捕されること、30 回以上。投獄されること、2 回。爆弾を投げ込まれること、数度。むしろ絶望とも呼ぶべき そうしたギリギリのところに身を置きながら、しかもなお、いまだ目にせぬ事柄を望み見て生きた。キング牧師の生涯とは、そのような生涯だったように思われます。神への信頼に基づく、希望の信仰。そこには、これが息づいていた。そう思われてなりません。

考えてみれば、私たちの生きる今この時・この時代も決して順風満帆(じゅんぷうまんぱん)とは言えず、大小様々な問題に右往左往(うおうさおう)しているとも言えるのではないでしょうか。地球の温暖化に起因する ― その意味では、人災地変(じんさいちへん)と言ったほうが的確でしょうが ― 様々な天災地変(てんさいちへん)から始まり、国内外の戦争、生命の軽視、管理主義、思想・信条の抑圧、人権侵害、差別、格差・・・といった社会的生きづらさが そこにはあり、さらには ― 人間として生きるいじょう、いついかなる時も免れえない ― 各人それぞれの個人的な問題も そこでは日々止(や)むことなく立ち現われてきます。「こんな厄介事が起きるなんて」「先の見通しはいったい どうなるのか」「あの人とはなんで うまくいかないんだろう」「人には言えないけど、家族の問題があって」などなどと。事ほどさように、地球大の問題から食卓大のそれに至るまで、私たちはこの時代にあってもまた、混沌(こんとん)とした日常の中に生きていると言えるのではないでしょうか。それらのどれをとっても、もちろん、一朝一夕(いっちょういっせき)に解決されて消え去るようなものでないのは言うまでもありません。そこでは多くの労苦が必要になり、そのための汗が流されねばならないでしょう。けれども、それにしても、私たちは思うのではないでしょうか。希望の欠片(かけら)でもいいから、その在(あ)り処(か)を教えてほしい。一条の光を見せてほしい。そう願うのではないでしょうか。私たちの現実は、春風に吹かれるような 心地(ここち)のよい時ばかりではないからです。暴風が吹いて、それがなかなか去らないような時が繰り返されるからです。そうしたなかにあってもなお射(さ)し込(こ)む一筋の光があれば・・・と思わされます。そんな思いを持って、今月の聖書を御一緒に読み進めていければと思います。

ヨハネによる福音書は 中ほどの 48 節で、こう記しています。「イエスは役人に、『あなたがたは、しるしや不思議な業(わざ)を見なければ、決して信じない』と言われた」。奇跡の類いに

は比較的淡白なこの私でも、ヨハネのしつこさには少々うんざりの感がしなくもありません。イエス・キリストは、不思議な業 見たさに来る人々を信用されなかった。その種のことを、ヨハネはすでに一度ならず 語っています。なのに、またここでも、といった感じです。何らかの理由がなければ、それこそ、本当にしつこい、となってしまうでしょう。想像の域を出ない部分もありますが、しかし、ヨハネ福音書が書かれた時代の情況から考えると、次のように推察されます。すなわち、ヨハネの福音書が書かれたのは、紀元の 90 年から 100 年ごろ。主イエスが世を去られて すでに、六、七十年が経っていました。しかも、ユダヤの地にあった教会は政治的・宗教的国難にみまわれ、教会の人々は国内外の各地に散り散りになっていました。そうした情況のもと、その散らされた各地に新たな教会が建設されていったのですが、となると、イエス・キリストの教えがあやふやになり、都合のいいように歪(ゆが)められても不思議はないのではないでしょうか。そんななか、奇跡的な業を 金科玉条(きんかぎょくじょう)、信仰に欠くべからざる 何より重要なものと言う人たちが出てきたものと思われます。不思議な業をめぐる問題です。ですから、これを取り上げ、主イエスが教えられた本来の信仰のあり方をいま一度、確認する必要があった。つまり、イエス・キリストは不思議な業見たさに来る人々を信用されなかった、と ヨハネが執拗(しつよう)に繰り返すのには、それなりの理由があったということです。

実際、今日(こんにち)の日本でも、新興宗教は、そのほとんどが依然として この種の信仰で人を集めています。病気が治る。お金が儲(もう)かる。出世ができる。揉(も)め事(ごと)がなくなる。不幸を遠ざけられる。幸福が舞い込む。挙げれば、切りがありません。どれもが「見えるしるし」です。神様も大変で、目玉の御利益(ごりやく)商品を用意しては、ディスカウントまでしなければなりません。私たちのキリスト教会も例外ではないようです。アメリカでは 今なお、テレビで集会の様子を放映する いわゆるテレビ教会が繁盛していて ― リモートやバーチャルが発展する今後は、もしかすると、さらにも盛んになるかもしれません ―、例えば、病に苦しむ人たちが会場を埋めるといった光景も目にします。その中から、何人かの人々が順番に、牧師の前に連れ出される。そして、牧師が患部に手を置いて祈ると、元気になって 席に戻っていく。その都度、聴衆の歓声が会場に響くといったぐあいです。「（・・・のために）祈ってほしい」と送られてきた手紙をテーブルの上に積み上げ、それらに手を翳(かざ)して祈る、といったものもありました。そのすべてが眉唾(まゆつば)とは言いませんが、しかし、初めにしるしを求め、それが期待どおりに見られたら、そうしたら信じるというのは やはり、聖書の信仰とはどこか違うのではないかと思わされています。事実、テレビの視聴者も集会の参加者も、いろんなグループのそれらにしょっちゅう 出入(ではい)りを繰り返している。そのようにして、願ったとおりの事が叶(かな)えられないと、別の所に乗り換え、それでもダメだと、信仰そのものに見切りをつけてしまうのです。それが、しるしを売り物にするテレビ教会の特徴ともなっています。

要するに、不思議な業(わざ)を見たい自分がまずあって、自分の見たい 自分のためのその奇跡を見せてくれたら、そうしたら信じる。しかし、それは実のところ 条件付きの信仰で、絶えずそうやって「この神様で 本当に大丈夫なんだろうか。ひょっとしたら、ダメなんじゃないか」と、神を試しながら生きている。そして、自分の期待どおりの 思いどおりの結果が得られないと、信仰そのものがぐらつき、ついには見切りをつけて、その神様を捨ててしまう。そのような姿勢です。

「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と主イエスが言われたのも、また その言葉を福音書が書き留めたのも、こうしたあり方に対し、「あなた方は何を信じて、どこに立っているのか」と問いかけたものなのではないでしょうか。それはまた、ヨハネ自身の深い傷痕から出たものだったのかもしれません。主イエスが墓に葬られたとき、3 日目に甦ると言われた その言葉を、使徒たちは信じることができないでいました。そして、迫害を恐れ、息を潜めて、隠れ家に身を隠していた。疑い深い あのトマスだけではありません。ヨハネも、その中にいたはずです。ヨハネもまた、言葉だけでは、すなわち約束だけでは イエス・キリストのことが信じられませんでした。復活の体を実際に見せてもらわなければ信じられなかった。その自分を、深い痛みを憶えながら想い返していたろうと思います。ですから、書き留められた 主イエスの言葉は、ヨハネ自身の悔恨の言葉でもあったにちがいありません。

今月の聖書の記事は、「二日後」という書き出しから始まります。43 節の冒頭です。「二日後」というのは、サマリアの町のシカルで サマリアの女性や町の人々と過ごした、あの 2 日間の後ということです。サマリアで過ごした その二日の後、イエス・キリストは目指していたガリラヤ地方に着き、再び、カナの町に向かわれます。43 節、46 節にあるとおりです。そこでの出来事は、ひと言で言えば、次のようになります。王の役人がいて、その息子が死にかかっている。役人は、息子を癒やしてほしい、と 主イエスに願い出る。イエス・キリストはその願いを聞いて、役人の息子を癒やす。大筋だけを言えば、そのようになります。ですが、これを単なる「癒やしの物語」として読み過ごすと、ヨハネ福音書の意図したことが見過ごしにされてしまうように思われます。福音書がこの出来事を記した趣意は、44 節と 45 節の言葉に、そして 先ほどの 48 節の言葉に隠されていると思うからです。ヨハネ福音書は 44 節で、「イエスは自ら、『預言者は自分の故郷では敬われないものだ』とはっきり言われたことがある」と記します。が 同時に、そのすぐ後で、「ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人々はイエスを歓迎した」(45) とも記している。主イエスはユダヤ地方のベツレヘムで生まれたものの、それは 両親が住民登録のために赴いた旅先での出来事で、彼らはそもそも、ガリラヤ地方のナザレという村で暮らしていました。実際、主イエスもそこで育てられました。ですから、ガリラヤがイエス・キリストの故郷でした。そのガリラヤを指して、主イエスは「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」と言われた。なのに、そのすぐ後で、その「ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人々はイエスを歓迎した」と、福音書はそう記すのです。いったい、どうなっているのでしょうか。

これを理解するには、ここに記されていない「故郷での出来事」を振り返る必要があります。それはマタイ、マルコ、ルカの 他の 3 つの福音書が揃って書き留めている出来事ですが、総合すると概ね、以下のような事件でした。イエス・キリストが故郷のナザレに戻り、ユダヤ教の会堂で聖書を取り次がれたときのことです。主イエスは言われました。「あなた方は、『他の所でしたしるしをここでも見せてくれ』と言うにちがいない。しかし、しるしはここでは示されない」。すると、人々は憤って、イエス・キリストを皆で町の外へ追い出し、崖から突き落とそうとし

たのでした。こうして、マタイは 13 章で、最後に 次のように記しています。「人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった」(マタイ 13：58)。これが、今回の 44 節の言葉の背後にある出来事です。つまり、ヨハネはこう語っているわけです。主イエスはかつて、故郷で、しるしを求める人々の不信仰を御覧になった。今また、エルサレムで不思議な業(わざ)を見たガリラヤの人々がイエス・キリストを歓迎している。が 彼らは、しるし見たさにそうしているにすぎない。だから、主イエスは言われるのだ。「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」。これが今回の出来事の背景で、そのようにして、主イエスは問われるのです。この私たちをも含め、「あなた方は何を求めて 聖書を読み、何を求めて 私のもとにやってきているのか」と。

役人の息子の癒やしは、こうしたなかで起こりました。王の役人が、カファルナウムに住んでいました (46)。イエス・キリストのおられるカナから 35 キロほど離れた、同じガリラヤの町です。息子が熱を出して (52)、死にかかっていました。主イエスが 以前、カナで水をブドウ酒に変えられた（ヨハネ 2：1～11）のを聞いて知っていたのでしょう。急いで 馬車を出し、主イエスのもとに向かいます。そして、カナに着いて 主イエスを見つけると、必死な思いで願い出る。「カファルナウムまでいらしてください。息子が死にそうなのです。癒やしてください」(47)。ところが、そんな役人に、イエス・キリストは思いがけない答えを返されます。50 節です。「帰りなさい。あなたの息子は生きる」。主イエスは、そこを動こうとされません。返ってきたのは、言葉だけです。そんなことを言われても、どこに治る保証があるのでしょうか。どこにもありません。その欠片(かけら)すら 見せてくれないのです。「帰りなさい。あなたの息子は生きる」と、ただ そう言われるだけでした。けれども、役人はその言葉に従って、帰っていきました (50)。そして、息子は癒やされました (51)。それはいつのことか、と僕(しもべ)たちに尋ねると、午後の 1 時といいます (52)。主イエスが「あなたの息子は生きる」と言われた、その時間でした (53)。こうして、役人もその家族もこぞって イエス・キリストを信じた、と 聖書は記します (53)。一つだけ説明を加えるなら、52 節で 僕たちが「きのうの午後一時」と言っているのは、ユダヤの時刻の数え方からきています。息子の危急の時です。役人は、カナに一泊したわけではありません。ユダヤでは当時、―深夜の零時(れいじ)に日を変える私たちの仕方とは違って―通常、一日を「日の入り」から数える仕方が採られていました。金曜の日没から土曜の日没までが安息日(あんそくび)とされたとおりです。したがって、日が沈んでから家に帰り着いた この役人の場合、日の入り前の 昼間の 1 時は「きのうの午後一時」となるわけです。

いずれにせよ、ヨハネ福音書の言わんとするところは明らかでないでしょうか。ヨハネは ガリラヤの人たちの態度と王の役人の姿勢とを対比させ、イエス・キリストが求められる信仰において大事なことは何なのか、そのことを語らんとしているのではないでしょうか。つまり、見なければ信じない信仰と見ないでも信じる信仰の対比であり、見なければ従わない信仰と見ないでも帰る信仰の対比です。王の役人にとっても それは、決して容易なことでなかったろうと思います。「あなたがた

は、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」。この言葉は役人にとって、試練だったにちがいありません。実際、私たちがこんなふうに言われたら、普通、どう思うでしょうか。どこかムッとし、反発を感じて、そして斜(はす)に構えるのではないでしょうか。加えて、「帰りなさい。あなたの息子は生きる」です。これは、さらにも大きな試練だったことでしょう。が、役人はそこで、気づいたのではないか。証拠を見て、だから それで信じたというのでは、そもそも 本当に信じたことになるのだろうか。相手への信頼というものは、そこには実は、ないのだから。そう気づかされたのではないかと思うのです。こうして、役人は主イエスの言葉に従った。そして、イエス・キリストはそこに、自分が求める信仰のあることを見られたのではないでしょうか。

ここで興味深くもあり、重要でもあるのは、直前に記されていた サマリアの町での出来事です。覚えておられるでしょうか。サマリアの女性も シカルの町の人々も、不思議な業(わざ)の一つをも見ることなしに、「主イエスこそ、世の救い主である」と、深い信仰の告白をしました。ヨハネはそのすぐ後、王の役人の同様な信仰とで挟(はさ)み込(こ)むようにして、「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」と、見えるしるしばかりを求めたガリラヤの人々のことを記しているのです。それはまさに、ガリラヤの人々の信仰にではなく、サマリアの人々の信仰にこそ、また王の役人の信仰にこそ倣(なら)いなさい、と 私たちにそう語りかけているように思えてなりません。

そのうえで、イエス・キリストは言われました。「あなたの息子は生きる（ζῇ <ζάω)」。ギリシア語の原文そのままの訳です。さらに言えば、いわゆる岩波訳はこれを「あなたの息子は生きている」と訳出して、原語のギリシア語（現在形）の含意をより明確に表現しています。いずれにせよ、主イエスは、あなたの息子は死にはしない、とはおっしゃられませんでした。あなたの息子は助かるだろう、とも言われなかった。「あなたの息子は生きる。生きている」と、そう言い切っておられます。それは見込みや予測などではなく、さらにも言うなら 単なる約束でもなく、ある種「宣言」とも響くような言い方ではないでしょうか。あなたの息子の命はすでに取り戻した。私の手の中にある、と そう言っておられるように響きます。それは ほかでもない、父なる神の慈しみと真実とを証(あか)しするもので、主イエスがその生涯を通して まずもって示そうとされたものだったように思われます。

加えて、役人は力の人でした。王の権力に仕え、その権力のもとで事を行なう、力の人でした。けれども、力ある その彼も、息子の命を救うことはできなかった。人の人生には、いつの時もどこか、私たちの力の及ばない、私たちの力ではどうにもしがたいことがあるということでしょうか。しかも、物理的・身体的な命を超えて、人を真に意味あるところに生かし、生きることに救いをもたらす 物理的命以上の「いのち」というものがあるとしたら・・・。聖書がより深いところで真実 問題にしているのは、いわば そのところではないか。そして、これまで見てきた 役人の息子の出来事というのも、単なる癒やしのあれこれを超えて、その向こうに目をやり、そうしたいのちの源であり与え手である主イエスとその神様とに目を向けるための「しるし」とも言えるのではあるまいか。そんなふうに思わされもしています。事を望み見、しかも 見える事柄を超えて、そのしるしの意味するとこ

ろに目を向ける。そのような信仰のもと、それぞれの命といのちを 今この時・この場所でうれしく生きていく、そんな自分でありたいと思っています。

実際、クリスチャンでも風邪(かぜ)はひきますし、癌(がん)にもなります。入院もするし、人生の危機にもみまわれる。リストラや家庭争議にも遭遇します。信仰を持てば、そうしたものがすべて消え去って何の心配もなくなるなどとは、聖書は言っていません。そんななか、何か事あるごとに、この神様で大丈夫だろうか？ と心揺さぶられていては、問題に立ち向かうこともできないでしょう。そうしたところに留(とど)まっていては やはり、平常の信仰は生まれないのではないでしょうか。イエス・キリストが下さるのは、そんなところから踏み出す 信頼の一歩のように思われます。御自身がそこに伴ってくださるからです。

手元の本に、病床に臥(ふ)せる一人の信仰者の詩が収められています。

微(かす)かながらも、私は感じるのです、
すでに知った祝福の跡から。
見えない向こうに、もっと素晴らしい祝福があると・・・。
この先、何が待ち受けているのか、私には分かりません。
喜びの驚きか、それとも 悲しみの驚きか。
でも、それが命であろうと死であろうと、私の心は穏やかです。
そこには、主の慈しみがある。
このこと一つさえ分かっていれば・・・。
この先、どんな困難が待ち受けているのか、私には分かりません。
でも、このことだけは知っています。
主の愛の御手(みて)からこぼれて漂うことはないと。

また、別のところですでに御紹介した小山晃佑(こうすけ)という著名な神学者（日本基督(キリスト)教団の牧師、宣教師で、アメリカのユニオン神学校で教授を務めた）は、次のように述べてもいます。

〔ヒトラーの迫害下、屋根裏部屋に隠れて暮らした〕「アンネの日記」・・・の〔あの〕アンネは、世界が悪に打倒されてしまうのではなく、必ずもう一度 平和と善の時がくると言っています。アンネは・・・「乳と蜜の流れる土地」を信じて生きました。・・・なんという力強い、美しい、霊感に満ちた人間でしょうか。・・・

暴風雨が去らないときでも 信ずる信仰！ それは 春風の心地よく吹いているときの信仰ではありません。それは暴風雨の中の信仰であります。・・・それは決して うすっぺらではありません。それは・・・力強くて、そして 深いのです。信仰は春風と共に、暴風雨と共に。それは 両方の天気の中で活躍するのであります。なんという、安売り

的精神生活、霊生活から離れた おごそかな事実でありましょうか。

混沌(こんとん)とした日常を余儀なくされ、右往左往(うおうさおう)させられながら、それでもなお そこを生き抜かねばならない私たちです。けれども、そこには信頼に足るお方がいてくださることを忘れないでいたく思っています。それは、だからといって、私たち自身の労苦や汗が免除されるというのではない。自身が負うべきものは やはり、あり続けるのだろうと思います。しかし、そうしたなかにあってもなお射(さ)し込(こ)む一筋の光は確かにある。いのちの取り戻しを宣言してくださった、その主イエスがおられるからです。

ちなみに、なんとも気にかかるひと言が この私にはあります。終わりにその点に触れて、今月の学びを閉じさせていただきたいと思います。それは 53 節の最後のひと言で、「彼もその家族もこぞって信じた」とある、ヨハネのその記述です。どういうことかというと、ここにある「彼」とは当然ながら、今回の中心人物である王の役人ですが、その彼は息子の癒やしを求めて それを主イエスに願い出たとき、50 節にあったように「イエスの言われた言葉を信じて帰って行った」わけです。そして、息子は癒やされた。それなのに、事が成った後、53 節で今また もう一度、「彼も・・・信じた」と記されているのです。息子の癒やしはすでに終わっているのですから、それが済んだ後で それをまた信じるというのは、どう考えても 筋が通りません。とすれば、50 節の「信じて」と 53 節の「信じた」とは、信じるその対象と内容が異なっていると考えるのが妥当ではないでしょうか。すなわち、王の役人は初め、主イエスの言葉を信じて、息子の癒やしを信じた。けれども、役人は今や、イエス・キリストという そのお方そのものに信頼を置いて、その真実と善意を信じた、ということではないか。そう読み取ることができるように思うのですが、いかがでしょうか。実際、ヨハネは、直後の締(し)め括(くく)りの一節でわざわざ、次のように述べています。「これは、イエスが・・・なされた、二回目のしるしである」(54)。「しるし」とは ヨハネ福音書を貫く いかにもヨハネらしい言い回しの一つですが、それは言うまでもなく、目に見える出来事の向こうに、表面的な事柄を超えて 真実 重要な本質的なことを読み取るために示されるものです。ここに記した癒やしの出来事はそのようなしるしの二回目であると、ヨハネは ― 特に書かずとも済むものを ― あえて念を押すようにして追加し、わざわざそう記しているのです。それはきっと、王の役人が、自分の願い事が願ったとおりに叶(かな)うか否かといった どこか即物的・御利益(ごりやく)的な在り方を超えて、今や 信仰本来のそれに導き入れられたことを示唆するためではないでしょうか。もしそうだとしたら、役人とその家族は この後(のち)、事がたとえ自分たちの願ったとおりに成らないようなことがあっても、なお信仰に立ち続けていったことでしょう。イエス・キリストというお方そのものに信頼を置いて、その真実と善意とを信じているのですから。たとえ 期待したとおりのかたちと仕方で事が成らなくとも、主イエスが偽りを言って、自分たちを裏切るはずはない。真実と善意をもって、自分たちの道々を顧みてくださる、と そう信じているのですから。この意味で、53 節の後半の一文こそがむしろ 今回の中心なのかもしれない、と 私には思われてなりません。

私たちの希望は、ここにこそあります。これを信じる信仰を携え・・・。この信仰によってこそ・・・。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたは目で見たり、手で触れたりすることのできないお方です。しかしなお、聖書に示された御子(みこ)イエス・キリストにおいて、今この時も またこの先も あなたの共なることを認められるよう、私たちを導き顧みてください。

あなたの御心(みこころ)のあるところを、私たちに教えてください。御旨(みむね)のある そのところを、私たちが祈り求めることができますように。私たちの信仰を豊かに養い育んでください。

困難な日々にみまわれるとき、そこにおいても 私たちがあなたの御言葉(みことば)に信頼し、なおも平静に、そして確かに立ち続けることができますように。どうか、あなた御自身が私たちの内に生きてください。そして、願わくは、御手(みて)をもって、私たちを悪と苦しみより救い出してくださいますように。

主の御名(みな)によって願い、お祈りいたします。

アーメン